

次元世界の首都である第一管理世界へミッドチルダは、大きく四つのエリアに分かれている。

東側には丘陵と森林を活かした観光地区。西側は海岸や平野を活用した商業地区。北側は山岳地帯に抱かれた歴史文化地区で、ベルカ自治区もここに位置する。そして、中央から南方にかけての都心部。連合政府や時空管理局の拠点は、大方ここに集中している。経済的・軍事的中枢として、あるいは連合政府の威信の象徴として、この都心部はまさに不可侵領域といえた。

その不可侵領域のど真ん中には、オブジェのように聳え立つビル群がある。中央庁舎と、その周辺に配されたナンバー庁舎。ミッドチルダ首都警防庁庁舎群は、世界のすべてを睥睨するようにガラスをガラスと光らせていた。

〈第一管理世界の警防部として首都警防庁を置く〉という一文によって、首都警防庁は存在が許されている。人口20億人という大規模な世界の治安は、単純な警防組織では務まらない。その理屈で設置された首都警防庁は独自に膨張を重ね、〈時空管理局統合幕僚会議に中央警防本部を置く〉〈中央警防本部は、各次元世界警防部を指揮監督する〉という条文さえ形骸化させている。

一般市民や民間企業からの支持が大きいのを盾に、彼らは権限の拡大を進めている。権

限を拡大することで予算配分のアンバランスを解決するという試みだが、政治的なものを除いた実情は惨憺たるものだった。

管理局予算が少ないのは民間からの寄付金で補い、人的資源の枯渇には警備会社への委託で対応する。折しも行政の効率化が叫ばれている時代、人件費と装備更新に多額の予算がかかる軍事警察部門の外注化は大きな効果を生み出していた。それが民間からの、とりわけ企業からの支持を集める要因ではあったが、本局の目にはそれこそが脅威として映った。

軍事警察部門は納税者を守るために整備された暴力だ。一個人や一法人の意思ではなく、最大多数によって決定された集団的な意思のもとに運用されるものだ。法律の帳尻をあわせたとはいえ、最大多数の意思という保証なしに任命された法人が武力を運用するリスクは計り知れない。

監視が必要。それが、統合幕僚会議<sup>本局</sup>の出した結論だった。

エレベーターを背に灰色に塗り込められた空間を歩いていくと、黒いコンバーチブルがちゃんと控えているのがわかった。革靴とコンクリートの撥ねる音が、のっぺりとした壁や

床に反響してベルの耳を苛む。時々漏れる舌打ちの音が響き渡らないのが不思議なほどだ。きつとエンジン音でかき消されているに違いない。助手席のドアを開けて、さほど柔らかくもないシートにどうと倒れ込んだ。

「ダメだ」

その言葉がつい口の端に上る。運転席からの視線が弱々しくなり、僅かにため息の音さえ聞こえてきた。「相手にさえしてもらえなかった」と続ける。

「『遺失物への対策は古代遺物管理部の専管事項であり、陸上警備隊が介入すべき事項ではない』だとさ。さすがは〈石頭〉の105だ、能書きにも隙がない」

「セクシヨナリズム……ですか」

お得意のな、と肩をすくめると、隣席はそれっきり黙り込んでしまう。コンバーチブルを転がす手付きは淀みないが、表情はまさに正反対だった。「慣れっこだと思ったが」と苦笑する。

「執務官への悪口はよく聞くんた、仕事柄な。ちよつと意外だよ」  
「慣れてはいます。そのたびに悲しくなる、というだけで」

それを慣れていないというんだ、と苦笑が深くなる。変にスレていないだけよしとすべきか、足元がお留守なのを危ぶむべきか。考えるだけ無駄なことに変わりはなく、ベルは

席の中でひとつ伸びをする。

フェイト・テストロッサ・ハラウン一等空尉相当執務官。執務本部次元航行部から引き抜かれた総合職執務官で、六課ではライトニン<sup>第</sup>グ小隊隊長と捜査主任を担当する。八神<sup>室長</sup>二佐の親友であり、例によって優秀さも折り紙つき。「同じ宮仕えだよ」という声は、本来なら必要ないはずだった。

「慣れておられるんですね、ベル三佐は。なぜです？」

似合わない猫なで声に、硬化した声が返ってくる。負けん気が残っているなら、まだマシか。半ば機械的に評価して、そんな自分に辟易する。「同じようなことをしていたからな」という言葉は、多分に弁明の色が入っていた。

「陸戦部隊は若手をスカウトして編成する。将来有望な同僚を引き抜くんだ、殴られても文句は言えん」

殴られれば殴り返す。何なら再起不能にだってしてやれるが、そこはそれ。同僚や後輩を一方的に引き抜かれるのが不快だとわからないわけでもない。理想は、因果な商売だと双方が諦めること。諦めと開き直りはどんな困難をも迂回するのだから、もっと褒められたいはずだ。

逃げ口上は諦めにもならない。自嘲するのもバカバカしい。「二度とやりたくないと思っ

ていたんだがね」と笑う。

「無能に嫌われるのも仕事のうち、嫌われているうちが華だ」

「……でも、嫌われるのは疲れるでしょう？ なぜ同行いただけなんです？」

面倒くさいやつだ。そんな思いがするりと胸に滑り落ちた。何事にも理由が必要な性分らしい。「簡単だよ」とため息をつく。

「どこかのエースが、フワード選定に俺の目利きがほしいと上申したんだ。それを真に受けた八神室長が、一尉に同行するように命令したのさ。……仕事だよ、要は」

どこまでも仕事だからできる話でしかない。血気盛んなテロリストを物言わぬ肉袋に変えてやることも、身内から蛇蝎のごとく嫌われるのも、結局は仕事として割り切っている。20代半ばで三佐とくれば、ここで退官しても引く手あまた。民間警備会社に入るもよし、危機なんちゃらコンサルタントとしてどこかの商社にもぐり込むもよし。貯めに貯めた金を使って大学に行き直すのもよしだ。

メアリーさえいなければ、すぐにでもやめてやるのに。ため息を二度つく愚行は犯さず、出る端から笑みに変換する。「趣味の方がよかったかな？」とからかっておく。

「いえ……助かります」

恐縮しきったように縮こまる運転席に、書き換え済の笑顔を向けておく。そりゃ助かる

だろうさ、なんて無意味なことは言わぬが花だ。士官という総合職に何年かいれば、それくらいの知恵は回るようになる。執務官に運転をさせるだけの立場にもなれば、回らなければおかしい類の思考回路ではあった。

地下から這い出るスロープはとうに抜け、コンバーチブルは首都高速に入り込んでいた。局員専用の出入り口から環状線に、しばらく走って3号線にまた移る。繁華街の合間に横たわるインターチェンジで、車は料金所を通過せずに脇へと逸れていく。

そのままネジ状になったトンネルで地下に潜りこむこと暫し。少しばかり開けた地下空間が、フロントガラス越しに顔を出す。次元航行艦隊司令部クラナガン派遣隊と書かれた鴨居の下で、見慣れた次元航行制服の青が佇んでいた。遠くからではわかりにくいが、ベルはその制服の胸に電子戦技能章を見て取った。「艦隊情報部別室か」とひとりごちる。

次元航行艦隊司令部第二部——通称〈艦隊情報部〉。統合幕僚会議第二幕僚部のカウンターパートとして、海賊等への警戒監視を主業務とする部門だ。その中でも別室と呼ばれるセクションは、テロ活動の一環として海賊行為を行うテロリストを専門に扱っている。陸戦総監部が殴り込みを代行する事例も多く、ベルにとっては割合馴染み深い部署だった。もっとも、それは表向きの話でしかない。ベルもそれはよくわかっていた。電子戦技能を持った人間が、首都繁華街の地下施設で海賊とばかり戦っているわけでもあるまい。目

の前の光景ひとつとっても、艦隊情報部の仕事が目く付きのものだとわかる。

艦隊情報部長は統幕情報部長が兼任し、本局内のオフィスも同じセクション。挙げ句、統幕情報部の一部施設を譲り、受けて活動しているのだから、何をか言わんや。ベルの目の前にある地下施設も、統幕情報部が建設して艦隊情報部が運用する代物のはずだった。

好んで穴倉の飛竜を突つつくこともあるまいに。ベルは運転席を胡乱げに見やる。「下りましょう」とシートベルトを外した執務官は、彼の視線には気づいていないようだった。ため息を倦んだ視線に転化しながら、あらためて外に立った制服に目を向ける。階級は二等空尉、艦隊司令部員章と電子戦技能章を胸に留め、それ以外は着用していない。体格や視線の運びからみて、実戦経験が少ないことは確実。暗号解読要員か情報分析要員か？結論の出ない考えを弄り回しながらドアを開け、地下の冷氣に苛まれつつ執務官の背中を追う。

ガラスを挟まずに見ると、入り口の男は思ったよりも若い。ベルと並ぶか、下手をすれば少し下。「お疲れ様です、ハラオウン執務官」という声に、彼はそんな考えを強くする。「ベリーさん。いつもありがとうございます」

もっと年下の彼女は、どうやら彼に敬語を使っているらしい。「こちら……」と紹介する素振りを見せた彼女にあわせて、ベルは無難に顔を向けておく。

「ビリー・アグラ二等空尉。艦隊情報部情報分析課勤務。執務官になりたての頃から、いろいろと情報を回してもらっています」

「アグラです。捜査情報といえるほど大したものではないんですが、お手伝いさせてもらってます」

情報部から業務的な根拠がないまま無償で提供される情報ほど怪しいものもない。欺騙、偏向ならお手の物だ。新設部隊をアドバールン扱いされてはたまらない。メアリーにしっかりと伝えておくべきだな。生存本能にしっかりと焼き付けておく。「シェリンフォード・ベルだ」と笑いかけるのを忘れずに、彼はアグラへの警戒心を最大限に引き上げた。

「情報分析課のホープか、期待してるよ」

心にもないお世辞も、仕事と思えば言えるものだ。人の頭をトマトと思うのと同じように、空虚な言葉も心からの労いに変えられる。良心を停止させておけばいい。シビリアンコントロールの配下では、軍人は物を考えたりしないのだ。

恐縮です、と頭を下げたアグラは、おもむろに執務官に向き直った。「新たな陸ネタです」と自分のホロ画面を立ち上げて、その複製をこちらによこしてくる。

「シトロネラ系メーカーが地上本部に装甲車を納入します。例によって独自裁量の現物寄付。正規の手段では足がつかないように、慎重にやっています」



納入仕様書、陸揚げ時の申請書類一式、輸送中の画像。港湾設備や幹線道路の監視システムをフル稼働させて、やることがセコい身内の覗きときた。いよいようんざりだが、モノがモノだ。新型の装甲輸送車、フル武装の魔導師八人を載せて不整地を高速で移動できる。これが首都防衛の妨害に利用されたら、少しばかり面倒な話になる。

「導入部隊は、やっぱり？」

執務官も同じ結論に達したらしい。やっぱりというからには、何かしらの別情報があるのだろう。アグラはひとつうなずいた。

「警備局ではなく、刑事局の特殊捜査班です。ゲイズ中将のおもちやがまた増えた形ですね」

ゲイズ——レジアス・ゲイズ中将。首都防衛長官、地上の番犬。本局からは揶揄を込めて「危険人物」と呼ばれている御仁。「懲りないな、おっさんも」と肩をすくめる。

「前も違法捜査でパクられた手下がいただろう。アレも刑事局じゃなかったっけ？」

「ええ。薬物ブローカーを拷問にかけたとかで」

「少しはおとなしくしときゃいいのに、今度は装甲車か。暴徒鎮圧でもするのかね？」

お寒い冗談のつもりだったが、アグラには伝わらなかったらしい。「放水銃も別会社から納入されてます」などと、誰が聞きたがるだろう？

「デモ隊を鎮圧する程度のことは、考えるかもしれませんね。今年の公開意見陳述会、開催場所はクラナガンだったのが専らの噂ですし」

聞きたくない話でも、それが現実なら対応しなければならぬ。山積する現実の一角なら尚更で、ひとつごとに拘泥している暇はなかった。「きな臭いもんだな」とやり過ごして、執務官に顔を向ける。

海賊対処を主業務とする部門が、仮にも身内の地上本部を調査対象にしている。この執務官は事の重大性を認識しているのだろうか。背任罪、下手をすれば通謀利敵罪か内乱罪だ。一審・二審を武装隊法廷で行う局内刑事事件ではなく、汎次元憲章裁判所での一般刑事事件として扱われる。

身内に甘い——懲戒免職処分、軍刑務所での十年未満の懲役がせいぜい——の武装隊法廷とは異なり、汎次元憲章裁判所には一切の容赦がない。平和と民主主義に対する反乱として極刑もあり得る。調査対象たる地上本部も逮捕権を握っていることを考えれば、リワードの有無にかかわらずこんな冒険をする気にはなれないというものだ。

艦隊司令官、事によっては連合政府首相自身の命令で超法規的活動に従事する情報部であれば、特権ルートでいくらかでもごまかせるのだろう。機動六課にはそれが無い。立ち上がってすらいらない部隊に期待するのもバカバカしい。「今に始まったことじゃないが」と

という言葉には、場繋ぎ以上の意味が滲んでしまっていた。

「そういや、最近は大次元航路規格デيلمマックス船を襲撃する海賊もいるそうじゃないか。お宅も大変だな」

領き程度の話に、アグラの目がひとつ揺れる。「よくご存知ですね？」という声に、若いという印象を強くする。

「陸戦総監部の方とは伺っていましたが……失礼ですが、所属はどちらになりますか？」  
「付、さ。陸戦総監部付指揮幕僚。立検はウチの領分だろう？」

表向きには表向きを返す。特殊戦開発グループの存在は公然の秘密とはいえ、簡単に認めてやるわけにもいかない。そもそもが部内の協力相手、彼が本気になればオフィスに戻って五分で正体が割れる話だ。むしろ、問題は隣に立っているエリート執務官の方。彼女が何を知ろうが知るまいが、公的にはお互いに秘密を守るべき立場にある。

身内に隠し事をする、同じ穴の貉と諒解したのか。アグラも「立検は不得手でして」とさばけた笑みを見せる。なんだ、結構話せるやつじゃないか。心得たという意思表示に、評価を修正する。